

景観とまちづくり

京都大学が東京・品川の「京大・東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ京大の知」（朝日新聞社後援）。5月23日、シリーズ3「安心安全生活まちづくり」の第3回講演が開かれ、川崎雅史・京大大学院工学研究科教授が「景観とまちづくり」をテーマに、フランスのパリや地元・京都などを例に取り上げて解説した。



「景観とまちづくり」について
わかりやすく語る川崎雅史教授

●「見方」がカギ

川崎教授はまず、「景観」という言葉の意味を整理した。

一口に景観といっても、心に残り人生に影響を与える「原風景」や、路地や界隈など人為的な要因で形作られる都市の「イメージ」、生物と同じように生息する視点からとらえた「安寧の場所」、さらに様々な媒体を通じて得られる情報によってつくられる「メディアイメージ」への認識がある。

いずれの「景観」も、視覚を通じて入ってきて記憶に蓄積されていく、という点では共通している。川崎教授はこう続けた。「山があれば山の景観があるわけではなく、山として見るから山の景観がある。要は、

『見よう』という見方があって、初めて景観が生まれるのです」

●まちの歴史、景観に宿る

こうした景観に軸足を置いた街並みの例として、川崎教授はフランスのパリを取り上げた。役所や駅、オペラハウスなどの公共施設とともに、随所に配置した公園、セーヌ川を中心とした道路や橋の敷設など、パリは「市民の品意にふさわしい都市のデザインを表現した」と指摘した。17世紀に建築されたパリ郊外のベルサイユ宮殿は、一本の軸を中心に左右対称な幾何学模様の庭園が美しい。この庭園の造り方も、パリのまちづくりに応用されているという。

さらに、米国カリフォルニア州バークリーなどで発展した、緑地を多く配置した田園都市をスライドで紹介。「緑を多く配置して自然を演出するまちづくりは、米国だけでなく他国にも波及して、一時代を築いた。日本では高級住宅街で知られる田園調布が代表例です」と述べた。

●風致のまち・京都

自然と都市が溶け合う街並みについて、話題は京都大学の地元であり、川崎教授が生まれ育ち、現在も暮らす京都に及んだ。

「京都は風致を強く意識したまちづくりが施されている」。川崎教授は、京都を語るキーワードとして、「風致」という概念を披露した。

本来は、「おもむき」や「あじわい」の意味を持つ風致。まちづくりの中では、1919(大正8)年に制定された都市計画法にある、自然環境の保全と佳良な居住環境を保つために創設された「風致地区」の制度を指すことが多いという。

盆地を取り巻く山々と鴨川を中心とする水辺。これらの自然を生かして築かれた由緒ある建築物。古都ならではの風景が現代も息づいている秘密は、この「風致地区」にあるという。

川崎教授によると、明治時代に、初代京都市長の内貴甚三郎が、寺社が多く集まる東山地区について自然と文化が融合した「風致保存の必要がある」と決断。1930(昭和5)年には、早くも東山地区一帯が風致地区に指定され、都市が大きく発展する以前に風致地区を決めてまちづくりを進めてきたため、昔の文化的景観が現在に引き継がれている」と解き明かした。



受講者たちは熱心に耳を傾けていた



川崎教授はスライドを効果的に使いながら話を進めた

●自然、防災にも利用

さらに、京都のまちは、自然を防災にも巧みに利用しているとも述べた。特に河川については、「やり水(庭園に水を引き込むこと)」として、自然の「水」を人々の生活に取り入れているという。

その例が、夏の風物詩として知られる「納涼床(のうりょうゆか)」。鴨川の河川敷に組み上げられてにぎわいを見せる納涼床は、鴨川の本流と川岸を挟んで並行して流れる「みそそぎ川」があってこそその

存在だという。本流と比べて水深が浅く、流れも緩やかなみそそぎ川は、水が蒸発して熱を奪うため納涼に適している。

だが、みそそぎ川には、ほかにも大きな役割がある。鴨川と、大阪に流れ込む高瀬川を結び、利水や水運にも貢献しているという。同時に、高瀬川の洪水などの水害を防ぐ効果があるのだ。さらに、庭園の中に流れるやり水は火災の場合にも利用される。

川崎教授は「景観と、利水や治水をうまく成り立たせている歴史は、いわば都市の羅針盤。現代の人の視点だけでなく、昔ながらの文化や知恵を生かすことが、これからのまちづくりには欠かせない」と強調した。

(※原稿及びクレジット未記載の写真は朝日新聞社提供)